

『震災の実』

牧師 柏 明史

先日、島田先生から招待券を頂いて、宮川忠大先生と一緒に映画を見に行きました。留岡幸助という牧師の生涯を描いた『大地の詩』という映画です。留岡幸助を演じた俳優の村上弘明さんがとてもハンサムで、「アー、こんな人が牧師だったら、きっと信徒もたくさん集まるだろうなあ」、などと不届きな思いを抱きつつ見始めたのですが、次第に留岡幸助のキリスト者としてのスケールの大きさに圧倒されていきました。

留岡幸助は、同志社で新島襄の教えを受けた牧師で、監獄の改善のために大きな働きをした人です。また彼は、犯罪の芽は幼少期に発することを知り、巢鴨や北海道に家庭学校を作り、少年感化事業にも力を尽くしました。

1891年、留岡は、北海道の空知の監獄の教誨師として赴任します。しかし、そこには鬼典獄と言われて、囚人たちに非常に恐れられていた有馬四郎助(しろすけ)という人がいました。当時、囚人たちは、剣と銃とに見張られ、足を鎖につながれながら、開拓事業の苛酷な労働に従事させられていました。苦役に耐えかねて脱走する者も後を絶たなかったと言われます。

有馬は囚人たちの人格を認めず、監獄の秩序を守るためには鬼のような厳しさをもって律すべきであると信じていました。また有馬は、大のキリスト教嫌いで、キリスト教教誨師から大変警戒されていました。

その有馬に対して、留岡は、「士族の魂も、町人の魂も、囚人の魂も、神の前には同じ値打ちのものである」と説き、そのことを自ら実践して見せます。

初めのうちは、留岡に激しく敵対していた有馬も、次第に留岡の生き方に魅かれ、心を開いていきます。

そして、遂に有馬はキリストを受け入れ、留岡から洗礼を受けて、クリスチャンになります。

ひとたび洗礼を受けると、有馬は非常に徹底した信仰生活を送るようになり、愛に満ちたクリスチャン典獄として、受刑者たちから敬愛されるようになります。その後、留岡と有馬は、監獄の改善のために共に働き、生涯の友となります。

映画では、留岡幸助が主役ですから、有馬四郎助はそれほど多くは出てきませんでした。しかし、有馬は、監獄における囚人たちの環境改善や社会復帰のために、そ

の後の生涯をささげていったのです。

現在の民主的な刑務所のあり方の基礎を築いたのは、有馬であったとも言われています。

有馬についてのエピソードとして、刑務所で新しい受刑者を迎える時、「私は君だけが罪人とは思っていない。私自身が罪人の頭だ」と言っていたことや、逃走した受刑者が捕まって帰ってきた時は、「よく帰ってきてくれた」と涙を流して喜んだという話や、それまで番号で呼ばれていた受刑者を「〇〇さん」という呼び名で呼んだことなどが、今でも語り継がれています。

大正12年9月、関東大震災があったとき、有馬は東京の小菅刑務所の所長でした。小菅刑務所は激震のために煉瓦造りの建物が倒壊し、受刑者たちは壁も鉄格子もない野原に避難しました。このような大混乱のなか、有馬の日頃の恩義に応えるのはこの時とばかり、受刑者たちは、「有馬に恥をかかせるな」を合言葉に、率先して自警団をつくり、互いに逃走を戒め合い、ついに一人の逃走者も出さなかったというのです。使徒言行録16章に、これに似た物語があります。パウロとシラスがフィリピで迫害を受け、投獄されてしまいます。それでも彼らは牢の中で神を讃美し続け、他の囚人たちはこれに聞き入っていました。すると真夜中、大地震が起り、獄舎が倒壊し、すべての牢の扉が開き、囚人たちを繋いでいた鎖も外れてしまう、という出来事が起こりました。看守は囚人たちが皆逃げってしまったと思い、責任をとって自殺をしようとし、その時、「死んではいけない。私たちはみなここにいる！」と大声でパウロが叫びました。看守があかりをもってきて調べてみると、たしかに一人の逃走者もいませんでした。皆、パウロとシラスの指導に従ったに違いありません。これを知った看守は、パウロとシラスを自宅に招き、一家揃って洗礼を受けたのです。いずれも、震災の時に起こった不思議な神様の御業です。今回の東日本大震災は、多くの教会に耐え難い困難をもたらしました。しかし、不思議にも、私たちに聞こえてくるのは、そのような困難の中で与えられた恵みの証ばかりです。

関東大震災の時、囚人たちが「有馬に恥をかかせるな」を合言葉に、日頃の愛に応じて自らを律したように、被災されたキリスト者の方々も、「キリストに恥をかかせるな」という思いをもって、どこまでもキリストに栄光を帰していこうとされています。

そのような思いが、震災の中で多くの信仰の実を結んでいるのを、私たちは見させて頂いています。

素晴らしい主の御名を称えます。